

一輪車がつかないだ家族

なかまた 中俣 咲耶

八月、ぼくの誕生日にじいちゃんからプレゼントをもらった。「一輪車かあ。」喜びよりも、不安が大きかった。「ぼく、乗れないのになあ。でも、せつかくじいちゃんが買ってくれたんだ。乗れるようになりたい。」これまで、一輪車に興味のなかったぼくが、乗れるようになりたいと思ったしゅん間だった。

練習が始まると、お父さんやお母さんが応援してくれた。応援にこたえるようにその日から転んでも、転んでも練習した。なかなか思うように、乗れない。すると、次の日、じいちゃんが、手すりを作ってきてくれた。

「じいちゃんありがとう。」
何も言わなかったが、にっこりとした優しい目がぼくを勇気づけた。

その日から、じいちゃんの手すりで練習が始まった。

手すりがあれば乗れると思ったが、つかまって立つのがやっとだった。気をぬくと、前や後ろに動いて、どうしてもバランスとれない。何度も挑戦するが、うまくいかない。

「さくやがんばれ。」

振り返ると、お父さんがにこにこしながら、練習を見ていた。

「よしっ。」一輪車に乗った。すると、不思議と落ちずに乗れた。うれしくなって、お父さんの方を見ようとしたしゅん間、転んでしまった。足を強く打ち、痛かった。心配そうに、お父さんが、

「今日は、もうやめたら。」

と言ってくれたが、こつをつかみ始めたぼくは、

「いや、まだ続ける。なんかできそう。」

一輪車を起こし、練習を続けた。その日のおふろの中で、

「いつもがんばっているさくやを見て、お父さん、うれしいぞ。」

てれくさそうに顔を洗うお父さんの一言がぼくの心をゆさぶった。「明日から、もつとがんばるぞ。」

それから、毎日、足を打ちながら、痛い思いをしながら、負けずに続けた。練習が、いやになる日もあった。そんなとき、決まって家族の見守りがささえになった。こんなに、一輪車に乗りたいたいと思ったことはない。どうしても、乗りたかった。そんな気持ちにさせてくれたのは、じいちゃんだったし、お父さん、お母さんだった。「家族っていいな。」

一輪車の練習を通して、ぼくは、家族の大切さとながりを感ずることができた。「家族のみんな、いつもささえてくれてありがとう。そして、ぼくに一輪車というプレゼントをくれたじいちゃんありがとう。」

そして、ついに一輪車に乗れる日がやってきた。家族が見守る中、いつものように手すりにつかまり、いつものように手をはなして、転ぶと思つた時、

「さくや、がんばれ。」

みんなの声援が、ぼくを一輪車に乗せた。